

## 1 研究主題

自分で考え、自分で判断し、表現できる生徒を育てる学習指導の在り方  
—評価からの授業改善を通して—

## 2 研究のねらい

全教科における評価からの授業改善を通して、指導と評価の一体化を図り、主体的・対話的で深い学びのある授業を実践することで、生徒が自分で考え、自分で判断し、表現できる力を身に付けることができるようにする。

## 3 研究の見通しと内容

### (1) 生徒の実態

本校の生徒は、ほとんどの生徒が同じ小学校から入学してくることもあり、男女の仲も良く、素直で明るい。雨の日でも自転車で登校する生徒も多く、根気強さも見られる。数年前までは規範意識の低い生徒も見られたが、現在は全体的には落ち着いた学校生活を送っている。やや荒れる要素のある生徒もいるが、生徒同士や教師との関係が良好なために前向きに生活を送れている。部活動や行事に積極的に取り組むことができる反面、学習面に課題が見られる。

### (2) 本校の教育目標

本校の教育目標は、「自立・貢献」である。自立とは、「自分で考え、自分で判断し、自分たちのことは自分たちで解決する。」ことであり、貢献とは、「人のため、地域のため、学校のために汗をかける。」ことと捉え、それらを「目指す生徒像」とし、全職員で取り組んでいる。

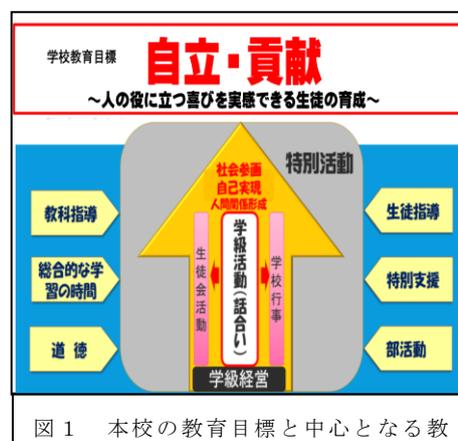


図1 本校の教育目標と中心となる教

### (3) 中心となる教育活動

本校では、「話し合い活動」を行事や授業など様々な活動の中心に置いている。生徒は、お互いに話し合うことにより、「意思決定」したり、お互いの意見を聞いて意見を「合意形成」したりする。それらを学校生活の様々な場面に設定することで、教育目標である「自立・貢献」に迫りたいと考えている。

## 4 令和二年度 学校の教育課程における特徴的な取組

### (1) 中心となる教育活動

本年度も、「話し合い活動」を行事や授業などの様々な活動の中心に置き、「自分で

考え、自分で判断し、行動できる」生徒を育成し、教育目標である「自立貢献」を達成したいと考えている。具体的には、特に、本校生徒の課題でもある「学力向上」に焦点をあて、各教科の毎時間の授業に「話し合い活動」を取り入れた対話型の授業をみずす授業改善を中心に学校全体で取り組んでいる。

## (2) 令和二年度 特色ある教育活動を推進するための計画

話し合い活動、単元計画、玉中授業スタイルなども昨年末の反省を生かしながら、今年度も行っていく。令和元年度の取組をRPDCAサイクルで見直し、カリキュラム・マネジメントの視点で改善を大なったところ、昨年度は「貢献」に対する取組があまり見られなかったことが明確になったので、今年度は、行事や総合的な学習の時間などで計画的に取り組むようにした。

## 5 令和二年度 実践と分析

### (1) 自立「自分で考え、自分で判断し、行動できる生徒」の育成を目指した取組

#### ア 4人グループによる話し合い活動

昨年度の2月のアンケートでも、生徒も教員も80%が「4人グループは学習などに役に立っている。」と答えており、生徒は、「グループになることで意見が出やすく、授業が分かりやすくなる」と答えた。そこで、今年度も4月より4人グループでの生活を行う予定ではあったが、新型コロナウイルスの感染拡大により4人グループでの活動ができなくなってしまった。今年度は、ホワイトボードの活用などグループにならなくてもできる「話し合い」を検討した。10月からは、保護者にも文書で伝達し、「1授業で15分以内の活動」など感染症対策をとりながら一部再開した。再開後は、85%の職員が「4人グループは学習に効果がある」と答えたり、「4人グループを再開したことで、生徒が積極的に発言するようになった」との意見があったりなど、本校の話し合い活動の軸になっていることが分かった。

「話し合い活動」を取り入れた対話型の授業をみずす授業改善

#### イ 玉中メソッド（相互授業参観）

昨年度、2月のアンケートでは、教員の80%が「相互授業参観は、自身の授業改善に効果があった。」と回答した。しかし、「各グループの反省が他のグループに生かされにくい。」など他のグループとの課題の共有やつながりに問題があることも指摘された。そこで、今年度は、研究授業後に「研究だより」を発行し、課題を共有したり、講師の先生の指導をまとめ、次の研究授業者の授業構成のポイントを示したりするなど、各チームの取組がつながるように改善した。また、行方市全体の取り組みである「評価からの授業改善」を受け、授業後の検討会では、抽出生徒を評価規準から評価し、そこから改善策を話し合うことに統一した。これにより、研究協議のポイントが明確になることで、各チームの取組がさらにつながるようになった。

#### ウ 単元計画と学習計画表の作成

今年度の授業づくりの目標は「生徒が分かったと実感できる授業」とし、本校における「わかる」とは、「授業を振り返り、自分の言葉で説明できる姿」とした。そこで、4月に研修を行い、学習計画表の中に80文字での振り返りを設定することにした。どのような振り返りを目指すかについても研修を行い、その頭文字を取

って「や・わ・お・つ」と玉中授業スタイルにも付け加えた。

（「や」やったこと。「わ」分かったこと。「お」思ったこと。「つ」次に学びたいこと）

全教科・全単元で単元計画と学習計画表の作成を目指したが、約90%達成することができた。振り返りについては、10月に研修を行い、「振り返り」の判断基準を設けた。「個人的な振り返り」から工夫して考え、取り組んでみたことの記述がある「活用的な振り返り」や、仲間の考え、表現のよさの記述がある「対話的な振り返り」、さらに、学びの中で考え表現してみたいと感じたことの記述がある「発展的・協働的な振り返り」を目指すことで、振り返りを次時に生かせるようにし、行方市全体での取組でもある「評価からの授業改善」にもつなげることができた。

#### エ 玉中授業スタイルの見直しと作成

昨年度の反省の中で、「授業中のどの場面で、どのような話し合い活動を行うのか」「生徒にどのような力を身に付けさせるのか」について目標が明確でないことが分かった。そこで、玉中授業スタイルを見直し、話し合い活動により「自分から情報を取りに行ける生徒」（自立）は主にパーソナルワークやグループワークで育成すること、「自分から意見を述べることができる生徒」（自立）は主にクラスワークで育成することとした。玉中授業スタイルは教師用と生徒用を作成し、生徒には話し合いによって「自分から聞ける」「自分から意見を述べる」（自立）ことを目指すことを示し、また、「授業で学んだことを人に説明できること（貢献）が「分かった。」ことであり、「友達に聞くことは、聞かれた友達のためにもなる」ことも示した。

11月に各教科で、玉中授業スタイル（話し合いを取り入れた対話型の授業）を取り入れた効果についてまとめところ次のような意見が出された。

（社会）4人グループでの話し合いやクラス全体での意見交換を行った結果、幕府や武士からの考察や一般市民から見た改革の様子など、多面的、多角的に三大改革について考察することができた。

（数学）話し合いやクラスワークでの比較検討を行ったことで、関心が高まり、3乗根や用紙に隠れた平方根を個人で追究するなど、生活の中にある数学に取り組む生徒が見られるようになった。

（理科）既知の性質を利用したりして水溶液を特定する学習において、効率的な実験方法を班で話し合わせ考えさせることで様々な手順について考えを深めることができた。実験プリントにおいては、他の人が見て分かりやすい内容を互いに確認し合うことで、結果に対する根拠を明確にした実験プリントを作成する生徒が増えた。

### 6 令和三年度 学校の教育課程における特徴的な取組

#### (1) 4人グループによる話し合い活動

本校生徒の改善を目指す課題として、「自分の意見を全体で積極的に述べること」が挙げられる。そこで、生徒同士の関わりを増やし、少人数で話し合いがしやすい4人グループを授業や日々の様々な活動に取り入れた。全学級、朝の会から4人グループで過ごし、学級の係活動や清掃もこのグループで行った。班ノートを毎日交換するなど、より深く互いに関わりあえる機会を増やしたことで、グループの結束力も高まり、授業中の話し合い活動にも生かされた。年度末のアンケートでは、教員

も生徒も約8割が「4人グループは学習の役に立っている」と答えた。しかし、「話し合いの内容に深まりがない」などの課題も出された。

## (2) 授業研究

「主体的・対話的で深い学び」の視点での授業改善を行うために、学年や教科、世代をこえたチームを編成し、チーム内で月1回の授業研究を行う。チームは、5～6人の異教科、異学年による4つのチームを編成する。校長、教頭、教務主任も入り、チーム内で指導案を共同立案する。授業後の研究協議では、授業者による、研究テーマを受けた工夫や評価基準に照らし合わせた、本時の目標の達成状況についての反省をもとに、学習課題の焦点化、個に応じた指導、意図的な発問など、視点を設けた協議になるようにした。話し合いの司会を輪番制にすることで、全員が研究協議を進められるようにした。協議後には校長、教頭からも助言を頂き、課題を明確にすることで、次の授業者につなげるようにした。

## (3) 単元計画と学習計画表の作成

「常に話し合う場面」を設定した対話型の授業を行うためには、単元のどの場面で話し合い活動を行うことが効果的であるかを授業者が意図的にねらっていかなければならないと考え、そのためにも「単元計画」の作成が必要であると考え。昨年度は、夏季休業期間に、これまでに各教科で作成した単元計画を見直した。特に、毎時間の課題が行動目標ではなく、疑問形（クエスチョン課題）に設定すること。学習指導要領をもとに「単元のねらい」を設定することに重点を置いた。また、単元計画をもとに、生徒に向けた学習計画表を作成した。「ねらい」を生徒の立場で示したものを単元の目標とし、（付けたい力を身に付けさせるための）目指す「活動のゴールの姿」や「ゴールとそれまでの道筋」を記入することを確認した。各教科で作成した学習計画表は、生徒に配付するだけでなく、各学年スペースに掲示し、いつでも確認できるようにした。さらに、授業づくりの目標は「生徒が分かったと実感できる授業」とし、本校における「わかる」とは、「授業を振り返り、自分の言葉で説明できる姿」とした。そこで、研修を行い、学習計画表の中に80文字での振り返りを設定することにした。どのような振り返りを目指すかについても研修を行った。また、「振り返り」の判断基準も設けた。「個人的な振り返り」から工夫して考え、取り組んでみたことの記述がある「活用的な振り返り」や、仲間の考え、表現のよさの記述がある「対話的な振り返り、さらに、学びの中で考えたり表現してみたいと感じたりしたことの記述がある「発展的・協働的な振り返り」を目指すことで、振り返りを次時に生かせるようにし、行方市全体での取組でもある「評価からの授業改善」にもつなげた。

## (4) 玉中授業スタイルの見直しと作成

昨年度の反省の中で、「授業中のどの場面で、どのような話し合い活動を行うのか」「生徒にどのような力を身に付けさせるのか」について目標が明確でないことが分かった。そこで、玉中授業スタイルを見直し、話し合い活動により「自分から情報を

取りに行ける生徒」（自立）は主にパーソナルワークやグループワークで育成すること、「自分から意見を述べることができる生徒」（自立）は主にクラスワークで育成することとした。玉中授業スタイルは教師用と生徒用を作成し、生徒には話し合いによって「自分から聞ける」「自分から意見を述べる」（自立）ことを目指すことを示し、また、「授業で学んだことを人に説明できること（貢献）が「分かった。」ことであり、「友達に聞くことは、聞かれた友達のためにもなる」ことも示した。

#### (5) 玉中タイムの設定による「学び直し」の時間の確保

職員と生徒の中間アンケートより、授業改善は進んだが既習事項が定着していないために「授業がわかった」という実感を伴った理解には至っていないことが分かった。そこで、基礎学力の向上に向けて、日課を変更し、学び直しの時間を確保するとともに、PDCA サイクルにより徹底した指導を行った。

### 7 成果と課題

#### (1) 生徒アンケートより

- ・授業が分かる . . . . . 78%→82%
- ・自分から進んで授業に取り組んでいる。 . . . . . 81%→92%
- ・課題を解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。 . . 80%→84%

#### (2) 職員アンケートより

- ・授業スタイルへの理解が深まった。 . . . . . 90%→100%
- ・4月よりも授業力が向上した。 . . . . . 81%→100%
- ・授業研究に積極的に取り組んだ。 . . . . . 96%→100%

- 日課表を変更し、学び直し、話し合い活動等を実施する時間を確保した。学び直しでは英語、数学を中心に全職員で対応した結果、「授業がわかる」と回答した生徒の割合が増加した。
- 基礎学力の向上に向けて学び直しの時間を設定した結果、「授業がわかる」と感じる生徒が増加して学力調査等の結果も微増となった。短期間での実施でもある程度の成果が見られたため年間を通して計画的に実施していく必要がある。
- 全教科で単元計画と学習計画を作成し学年フロアーに掲示したことで、生徒が見通しをもって学習に取り組むことができるようになったため「自分から進んで授業に取り組んでいる」と回答した生徒が増えた。
- 授業スタイルの見直しを行ったことで、先生方の授業スタイルへの理解が深まり、「課題を解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる」生徒が増加した。「自分の意見をまとめて説明すること」にはまだ課題が見られる。